

「実証的教室研究」

プロジェクト報告

Schutterle Holger

1. はじめに

本稿は麗澤大学の研究プロジェクト「ティームティーチング（以下、TT と略す）の行動観察」における経過および第一次結果報告である。この行動観察は日本人教員とドイツ人教員の両教員による「第二外国語であるドイツ語」の授業での新たな試みである。両教員は共同で授業を計画し、同じ教室で授業を行う。本稿では TT の授業形態、研究の意図、観察方法およびその結果を概観し述べる。

2. TT（ティームティーチング）

大学で外国語であるドイツ語の習得においての TT についての記述はほとんどなく、大学前の小学校、中学校、高等学校のそれにおけるものがほとんどである。その場合も TT の概念は多種多様で、ほぼ全てが複数の教員の共同作業を意味するものが多い。例えば、科目を限定せずとも、教員が共同で作業をすれば、同時に教壇に立つことはなくとも、TT と見なされるのである。¹

Zürich 大学の TT の定義に関する文献で取り上げられたケルン大学のそれが、麗澤大学の TT の定義に最も相似的と思われるので、以下記述する。

「TT は二人以上の教員が共同で授業を行う教授法である。この教授法では教員側と学習者側がお互いに関わり合うことが前提となる。これにより一人の教員から受ける影響が少なくなるので、視野を広げ、さまざまな方法や新たな提案を取り入れるのにとっても適した教授法である。教員は授業を他の教員と共同で計画する機会が与えられる。その際、今まで培ってきた異なる経験をもとに学習者中心の授業が行われる。これにより一人一人の教員の負担も軽くなり、教員自身もお互いに学ぶことができるなど、無限の可能性を秘めている。」²

3. 研究の意図

両教員による TT の授業は、学習者のモチベーションの向上、およびドイツ語の学習に集中的に取り組むことを促す目的がある。二人の教員が教室にいるということは、それぞれの経験、知識が授業で生かされることになり、チームとして協力し、新しい授業の進め方を展開していくという趣旨がある。興味深いのは、この授業がドイツ人と日本人の二人の教員によって行われる点であろう。異なる専門分野、異なる教員の授業の進め方に加え、文化的要素も加わってくる。それにより、一般的な日本人の教員またはドイツ人の教員のみで行われる授業とは、TT の授業における学生の反応の相違が予想される。

¹ Reich, K. (Hg.): Methodenpool. In: url: <http://methodenpool.uni-koeln.de> 参照

² Brigitte Frommerz, Therese Halfilde: In: Zürich: Pädagogisches Institut der Universität (2003): Teamteaching an Unterstufenklassen der Stadt Zürich. Beobachtungen in sechs Klassen. (原文ドイツ語、筆者訳。)

4. 観察条件

学生は、すでに一年間、「外国語としてのドイツ語」の授業を週二回の頻度で受けており、学生がこの授業を選択できるようになっている。

5. データ収集

授業の様子は一学期間、学生の上承を得て、ビデオで撮影され、観察者により考察される。このために90分の授業が28回分、42時間分の授業が撮影された。

この研究は仮説を定義するものではなく、TTの授業経過を記述するものである。その際、以下のことに焦点を当て、行動観察は行われる。

行動観察で考慮すること：

日本人教員とドイツ人の教員の授業における役割分担がどのように行われているか。

授業における母語教員とネイティブスピーカーの教員のコミュニケーションの取り方

6. 行動観察の結果報告

行動観察は日本人教員とドイツ人教員の両教員の準備段階から始まり、まず二人の会話が録音される。主に取り上げられるテーマ、どの問題をどの順序に行うかについて、授業前に詳しく話が進められる。しかし、授業でのコミュニケーションの取り方および授業での役割分担については、授業の前に決められていない。

授業においては、説明をする時、次の活動の指示を出す時など、両教員のコミュニケーションはその直前に行われる。相談が必要な時などは、学生が活動をしている間に相談する様子が多く見られる。両教員は学生全体の前で

話すときなどは視線などで合図を送り、意思疎通を図る。これにより授業の進行が妨げられるようなことはなく、授業が中断されるようなことや学生を混乱させるような様子も見られることはない。

これ以外にも観察によって気づいたことは、ドイツ語の語彙や文章、テキストについて、コミュニケーションが実際にどう行われるか、という説明を要するとき、日本人教員が日本語で行うのではなく、二人の教員がダイアログなどで例を挙げながら、ドイツ語で説明が行われていた。学生の反応を見ても、この方法は理解しやすかったようである。

TT を新たな取り組みとした一学期間の授業観察はとても収穫の多いものであった。個人的な見解であるが、学生が説明を必要とする時などは時々日本語での説明を加えるなどしたら、授業はもっとスムーズに進められ、学生も活動に集中できるのではないだろうか。日本人とドイツ人の教員の役割分担を明解にすることにより、更なる効果も期待できると思われる。モチベーションを高くする効果としては TT はとても有効な方法だと思われるので、これからも取り入れていけば、更なる効果が期待できるであろう。